

## 古楽愛好家，J. ホーキンス

### J. Hawkins as A Lover of Ancient Music

今 井 民 子\*

Tamiko IMAI

#### 論文要旨

本稿では、『音楽の学と実践の通史』(1776)の著者，J. ホーキンス (1719～89) をとりあげ，その生涯の多面的な活躍と『通史』成立の事情をさぐり，さらに，ホーキンスが『通史』で詳述した3人の音楽家，T. ブリトン，J. C. ペプシュ，J. イミンズの功績を検討する。ホーキンスが強い共感を寄せた3人の音楽家の市民コンサートの主宰者，すぐれた音楽の収集家としての活躍と，古楽尊重の視点は，音楽の専門家で同時代の音楽に目を向けたC. バーニーと根本的に異なるものといえよう。

キーワード：J. ホーキンス，T. ブリトン，J. C. ペプシュ，J. イミンズ，市民コンサート

#### はじめに

J. ホーキンス (1719～1789) の『音楽の学と実践の通史』(1776) は，C. バーニーの『音楽通史』と並んで，近代音楽史学の金字塔といわれる。本稿では，まずホーキンスの判事，著述家，音楽家としての多面的な活躍と『通史』成立の事情をさぐる。次に，ホーキンスが『通史』で積極的にとりあげた，一般の音楽史ではほとんど言及されることのない3人の音楽家，T. ブリトン，J. C. ペプシュ，J. イミンズの記述を検討しながら，『通史』の背景にある彼の音楽観を明らかにする。

#### 1. 多彩な生涯

ホーキンスの家系は，かつてスペインの無敵艦隊を破り武勲をたてた提督，サー・ジョン・ホーキンスの末裔であると主張されているが確証はない(以下，J. Hawkins, 1776, *Life of Sir John Hawkins*, pp. ix～xviii)。父は大工で服飾商組合に属する自由市民であったが，ホーキンスは，いくつかの学校でラテン語を修得し，1736年頃よりある判事のもとで5年間の苦しい年季奉公の末，法律家として独立，開業する。1753年，富裕な判事の娘と結婚，さらに妻の兄弟の多額の遺産を相続したため(1759年)，本業の仕事を離れて田舎のトゥイックナムに移り住み，文人，芸術家との交際を深め，著述と資料収集に専念する。しかし，彼の有能な判事としての手腕は生涯発揮されることになる。

例えば，道路事情の悪化した街道の修復案を国会に提出したり(1763年)，居住するミドルセックス州に多額の負担を強いるニューゲート監獄の再建案を阻止する陳情を行い(1764年)，

\* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

1765年にはミドルセックスの四季裁判所の長官に就任した。その後も、フリート監獄の居住教区への移転問題では教区住民を代表してこれを阻止、さらに、ブレントフォードの選挙をめぐる暴動や、スピタルフィールズの職工たちの騒乱を勇敢にも鎮圧した。

アメリカの独立戦争間近の1775年には、国王ジョージ三世を前に、移住民たちを擁護する演説を行う栄に浴している。1772年、ホーキンスはナイトの称号を賜わるが、これについては、ホーキンスが国務大臣ロシュフォード卿に宛てて書いた嘆願書が残っている。(B. H. Davis, 1973, pp.240~246)。内容は、敏腕判事として知られたライバルのウエストミンスターの四季裁判所長官、サー・ジョン・フィールディングがすでにナイトに叙せられているので、自分も賜わりたいという強い調子のものである。この背景には、ミドルセックスとウエストミンスターの両地区の裁判所の勢力争いと、自分の後任ポストをねらうフィールディングを牽制する意図があったのだが、この一件は、ホーキンスの名誉欲というよりも、自分の実績に対する公正な評価を求める一徹さのあらわれと解釈できよう。

著述家としてのホーキンスの活動は、1740年頃から始まる(以下、J. Hawkins, 1776, pp.ix~xviii)。彼は『ジェントルマンズ・マガジン』をはじめとする各種の雑誌に、詩や批評を勢力的に執筆した。多岐にわたる記事の中では政治に関するものも多く、例えば、17世紀以来の王位継承権を主張するジャコビアン派を退け、現王朝を支持した際には、政府の要人から政界入りを勧められたこともあった。また、T.ハンマー及びジョンソン博士とG.スティーヴンズによる2つのシェイクスピア全集の編纂作業では註釈を依頼され、見事に責任を果たした。

ホーキンスの文筆活動において、18世紀最大の知識人であるジョンソン博士の影響を忘れてはならない。ホーキンスは、1749年以来のジョンソン・クラブの古い会員であったにもかかわらず、やがて会員たちの不興を買い脱会する。しかし晩年の1783年、死期の迫ったジョンソン博士から遺言執行人の1人に指名される。ジョンソン博士の息子の証言によると、ホーキンスは博士から主に実務上の問題について長年相談をうけていたらしい。さらに彼は、書籍商組合からジョンソン博士の全集出版と伝記の執筆を依頼された。1787年に完成した伝記は、後年、同じジョンソン伝を著した宿敵のJ.ボズウエルから「饒舌すぎて本論を逸脱している」と非難され、概ね不評に終わった。ホーキンスに対する不等に低い評価は、ジョンソン・クラブの会員たちとの敵対関係に起因するところが少なくなかったと思われる。

## II. アマチュア音楽家と『通史』の出版

ホーキンスは決して音楽の専門家ではなかったが、早くから音楽に関心を寄せていた(以下、B. H. Davis, 1973, pp.45~66)。1742年とその翌年、彼はまず盲目の作曲家でオルガニストのJ.スタンリーに詩を献呈して作曲を依頼し、6曲のカンタータ集を2組出版した。ホーキンスは、スタンリーをコレッリやA.スカラルラッティにも劣らない、パーセル以来のイギリスの誇る音楽家と称える詩を彼に寄せ、イタリア音楽に対抗してイギリス音楽の樹立を願う強い愛国心も見せている。カンタータの詩は擬古典的な感傷的恋愛詩で、ヴォークスホールなどの娯楽場で女性たちに愛唱され、何度も版を重ねた。その他、友人の作曲家、W.ボイスとの共作では、1751年の《戯れの恋はむなし》と、1777年の友人でカンタベリー大聖堂の参事会員、W.ゴスリングの死を追悼する歌がある。

ホーキンスの所属した音楽愛好家の市民コンサートの中では、古楽アカデミー(1726年設立、1743~48年まで所属)とマドリガル協会(1741年設立、1748年入会、1752年再入会、66年まで

所属)が特に重要であるが、その他の定期的なコンサートにもいくつか参加し、彼自身演奏に参加することもあった。1770年、財政難に陥った古楽アカデミーの救済のために、ホーキンスは『古楽アカデミーの設立と発展に関する報告』を出版するが、後に書き改めたものが『通史』に再録される。

古楽アカデミーの会員の中でも、ペプシュはその博識と貴重なコレクションで、またヘンデルは卓越した音楽性でホーキンスに多大の収穫をもたらした。ホーキンスの伝記を書いた娘のマチルダは、ヘンデルがしばしばホーキンスに新作を聞かせて感想を求めたという、大音楽家と若い判事の友情を物語るエピソードを紹介している。1758年、ホーキンスはヘンデルの前任者としてハノーヴァの宮廷楽長を務めたA.ステッファニーの作品集の序文に短い伝記を書き出版するが、これは彼の音楽関係の最初の著作といえる。

ホーキンスが『通史』の執筆を決意したのは、1759年頃、H.ウォルポールの勧めによるものらしい。(以下、B. H. Davis, 1973, pp.115~132)。音楽のアマチュアであるホーキンスのために、楽譜や理論書などの資料の収集において、友人たちは協力を惜しかなかった。当時、イギリス人による音楽史は、1730年のP.プレラーによる貧弱な『簡略音楽史』だけであった。ホーキンスは多忙な判事の仕事のかたわら、大英博物館(1761-75年)やオクスフォードのボードリー図書館(1772年)を訪ねて資料を閲覧し、また、ウォルポールやゴスリング、スティーヴンズ、ポートランド公夫人らの個人コレクションからの資料提供もあった。

ホーキンス自身による主に理論書を中心とする収集は、富裕な判事の娘との結婚と、それに続く義兄の遺産の相続により本格化する。1770年に古楽アカデミーの危機救済のためにホーキンスが書いた『古楽アカデミー報告』は、『通史』の執筆開始に何らかのはずみとなったことは疑いない。彼は1771年には第1巻を早くも完成し、続く1772年と73年にも第2巻と3巻を順調に仕上げた。1773年には、ホーキンスに対抗するバーニーの著書の出版報告が出るに及んで、2人を支援するグループの競争熱も高まった。ホーキンスの最後の第5巻が出版されたのは、1776年11月で、すでにバーニーの初巻本の出た7ヶ月後であった。

出版に先だち、ホーキンスは国王ジョージ三世へ『通史』を献呈する許可を得て、宮殿で国王に拝謁する。娘のホーキンス伝によると、国王夫婦とはうちとけた音楽談義がかわされ、保守派の国王は新しい音楽を好む王妃への不満をもらしたが、宗教音楽の軽々しい旋律には王妃も批判的でホーキンスと意見が一致したという。『通史』は出版直後から反響があり、石炭商ブリトンの市民コンサートやH.パーセルのエピソード、プリマドンナ、クッツォーニーとファウスティナとの対決など、特に人気のある記事は多くの雑誌に掲載された。ホーキンスへの評価は、記述が確証に欠けるといいうものもあったが、広汎かつ深遠な内容と称える好意的なものが多かった。

### III. 3人の古楽愛好家

ホーキンスの音楽観に大きな影響を与えた音楽家として、J.ブリトン、J. C. ペプシュ、J. イミンズの3人が挙げられる。彼らはアマチュアの市民コンサートの主宰者として、またすぐれた音楽の収集家としてホーキンスのよき先達となった。ここでは、3人に関する『通史』の記述を検討する。

## 1. T.ブリティン

T.ブリティンは、中部イングランドのノザンプトン州に生まれ、ロンドンに出て石炭商の従弟となり、7年の年季奉公のあと一度故郷にもどるが、再びロンドンに出て石炭商を始める（以下、J. Hawkins, 1776, pp.788—89）。彼は隣人の化学者から化学を学び、自ら考案した移動実験室は専門家の間で評判となり、同じものを注文するものもあらわれた。ブリティンはまた、音楽の理論と演奏も独学し、1714年に60歳すぎでなくなるまで、40年以上にわたりロンドンで市民コンサートを組織し、同時に音楽資料の収集に努めた。彼は低い身分ながら、その誠実さと聡明さ、勤勉さ、慎ましきさであらゆる階級の人々から敬愛された。彼は博識で知られたにもかかわらず、生涯、生業の石炭商を誇りとし、青いリンネルのスモックを着て石炭袋を背負い、通りを売り歩いた。

ブリティンのコンサートは、その後18世紀のロンドンで普及する市民コンサートの最初のものとして重要である。17世紀の当時は珍しかったので、騒乱や魔術のための不穏な集会と見られたり、ブリティン自身、無神論者や長老派、イエズス会派の信者と間違われることもあった。会合の最初は、ブリティンの隣人で醸造家の大衆詩人が経営する居酒屋を会場に、音楽愛好家が始めたものだといわれる。コンサートの旗揚げは、ブリティンの自宅で行われたが、その後イルズベリー通りの別の場所に移った。石炭倉庫の2階にあるコンサートの部屋は、幅が狭くて奥深く、背の高い人がやっと立てるほど天井が低く、部屋に通ずる外階段は、這ってよじ登る代物だった。しかし、外観のみすぼらしさとは裏腹に、ブリティンのコンサートはオペラに劣らず上流の人々を魅了し、当代一の名流夫人、クィーンズベリー公夫人も常連の一人だった。

コンサートの曲目は、ブリティンの楽譜のコレクションに含まれる古今の音楽作品であったと思われる。ペプシュとヘンデルがハープシコードを担当し、ヴァイオリンには当時の主だった演奏家の他に、作家のJ.ヒューズや肖像画家のウォーラストンらも参加した。すでにデビューを果たしたある少年ヴァイオリン奏者は、腰掛けの上に立ってコレッリの作品を演奏したが、華やかな聴衆への畏怖の念から床に転げ落ちそうになった。ブリティン自身の演奏の技量は明らかでないが、彼はハープシコードを調律し、ヴィオラ・ダ・ガンバも演奏した。コンサートの会費は当初無料であったが、その後毎年10シリングが徴収され1杯1ペニーのコーヒーが出された。

最後にブリティンのコレクションについて検討する。18世紀に入ると、貴族たちの間で古書や手稿の収集熱が高まり、ブリティンは親しい貴族の収集仲間に加わって資料を購入した（以下、J. Hawkins, 1776, pp.792—93）。ブリティンのコレクションは彼の死後、1714年の12月、3日にわたる競売で処分されたが、コレクションの詳細は競売カタログからわかる。それによると、彼のコレクションは今までの競売品の最高のもので評価され、コレクションのすべてはブリティンの所有であり、古今のすぐれた楽譜集はきちんと整理、保存されていたという。そこには、音楽分野以外の1400冊から1500冊の書籍を除く、楽譜や楽器の詳しいリストが列挙されている。

まず器楽では、160に及ぶ項目があり、自国のイギリスでは、ルネサンスのバード、ブル、ギボンズのオルガン曲、17世紀のジェンキンスやシンプソン、ロック、ローズのコンソート、エール、リュート曲、同時代のパーセル、ペプシュの作品などを網羅し、その他イタリアのヴィタリ、コレッリ、トレッリ、アルピノーニ、ヴィヴァルディ、ドイツのヴァルター、ビーバーのソナタやコンチェルトも多数含まれる。42項目からなる声楽では、ウィルビーのマドリガル、タリス、バード、ギボンズの宗教曲、ダウランドの歌曲、パーセルとブロウの宗教曲、《ハイダ

スペース》その他の17世紀イギリスのオペラ、ペプシュのcantataなど。総譜は11項目あり、グラビュやパーセルのオペラ、宗教曲の他、リュリイの作品も含まれる。27項目の楽器では、イギリス国内外のすぐれた製作者による、ヴァイオリン、ヴィオラ、ハープシコード、ヴァーヂナル、ポジティブオルガンの他、ダルシマーや魚の形をした民族楽器も含まれる。さらに、デカルトやモーリーらの音楽理論書を若干含むこれらの膨大なコレクションは、その規模と時代や地域、ジャンルの多様さにおいて驚異的なものといえよう。

## 2. J. C. ペプシュ

ペプシュは、音楽の模範を古楽に求めるうちに、その復古演奏の必要を痛感し、1710年、古楽アカデミーを仲間と設立する（J. Hawkins, 1776, p.832, 但し、正しい設立年は1726年とされる。B. H. Davis, 1973, p.54）。1734年、王室礼拝堂の少年聖歌隊指導者のゲートがあるいさかいのために、アカデミーから応援の聖歌隊を引き上げる事態が起こった（以下、J. Hawkins, 1776, pp.885-86, なお、バラッド・オペラの作者としてのペプシュについては、今井, 1999を参照）。これをきっかけに、アカデミーではペプシュの指導による音楽教育が始まり、優秀な音楽家が数多く育った。

アカデミーは国外の著名な音楽家とも交信し、積極的に自作を送ってくれたA. ステッフアーニを会長に選んだ。また、A. ロッチェとは、あるマドリガルの作者について問い合わせた際、彼の自作とアカデミー所蔵の作品を互いに送った。アカデミーでは、国外の著名な音楽家が演奏することも多く、トージはオペラのアリアを、ポノンチーニはチェロのソロ曲を、またジェミニアーニは自作のヴァイオリン曲を披露した。1732年には、貴族オペラとの対立で苦しむヘンデルを励ますため、アカデミーのメンバーたちが彼のオラトリオ《エステル》を演奏してその再演を決意させたこともある。アカデミーの目的は、気まぐれや新奇さを抑制し、古典的純粹さと優雅さ、つまり正しく合理的な趣味の確立で、過去のすぐれた作品の復古演奏を通してそれは実現された。

ペプシュの貴重なコレクションには、楽譜と様々な言語による音楽理論の書籍や手稿が含まれる（以下、J. Hawkins, 1776, pp.907-9, A. H. King, 1963, p.16）。1752年にペプシュがなくなると、コレクションは遺言通り彼の親しい友人のトラヴァース（王室礼拝堂、セント・ポール大聖堂その他のオルガニスト）とE. ケルナー（ドルリー・レーン劇場のオーケストラ奏者）に譲渡された。トラヴァースはその後まもなくなくなり、1766年の競売でコレクションは売却された。一方、ペプシュのコピストを長く務めた学識あるすぐれた音楽家のケルナーは、自分の助手にコレクションを遺贈したが、家主の女性が所有権を主張したため、彼は訴訟をおこしてこれを取りもどした。コレクションの一部は個人に譲渡され、残りは1763年の競売に出されたが、この中には特に貴重なものが2つある。

その1つは、1588年に敗北したスペインの無敵艦隊の船荷の中にあっただと思われるアンティフォナ曲集、もう1つは、エリザベス女王が鍵盤の練習曲に使った膨大な量の手稿譜で、J. ブルの練習曲も含まれている。これらは、ペプシュ夫人のマルガリータが歌手を引退後、長年楽しんだハープシコードの演奏に愛用した楽譜集とされ、何度も頁をめくった跡が残っている。ホーキンス自身も、ペプシュが晩年書いた音楽理論の手稿を入手したが、これらは即出の理論書で言及されたもので、もはや音楽の発展に寄与するものではないとしている。なお、ペプシュの作品の手稿譜は、彼と関わりの深い古楽アカデミーに遺贈された。

### 3. J.イミンズ

最後に、ペプシュの弟子のイミンズと彼の主宰したマドリガル協会について述べる(J. Hawkins, 1776, pp.886—87)。イミンズは法律家のアマチュア音楽家で、古楽アカデミーのメンバーとしてコピストを務めたが、力強いカウンター・テナーで楽器も一通り演奏し、とくにリユーートは、一時宮廷リユーティストを務めるほどの腕前であった。彼は1741年、マドリガル協会を設立した。25人ほどのメンバーの多くは、職工やその他の職人であったが、イミンズの指導により楽譜を見てマドリガルを歌うことができた。

年4回、5シリング6ペンスの会費を徴収して楽譜や書籍を購入し、コンサートでは軽食やタバコが供された。会合は毎週水曜日の夜、町の居酒屋で行われ、セント・ポール大聖堂の少年歌手も若干加わった。そこでは、イギリス、イタリアのマドリガルの他、気楽なキャッチやラウンド、カノンも歌われ、時にはイミンズがツァルリーノのある章を講義することもあった。彼は協会のために精力的に楽譜の筆写に努めたが、彼の趣味はペプシュの影響からあくまでも古いもので、ラッソやマレンツィオ、ヴェッキなどを愛好し、彼らの作品を収集し熱心に研究した。

ブリトンやペプシュ、イミンズに関するホーキンの詳しい記述は音楽史では異例である。因みにバーニーの『音楽通史』では、ブリトンとイミンズは全く言及されず、ペプシュもその生涯と業績が簡略に紹介されているにすぎない。またその評価は、旋律と和声の適合を直に見分ける和声理論家としての能力を認めながらも、古くさいあいまいな音楽しか認めない古楽の偏愛家と結論されている(C. Burney, 1789, p.989)。アマチュアリズムを確立し、古楽を尊重した3人の音楽家に対するホーキンの強い共感は、音楽の専門家で同時代の音楽に目を向けたバーニーの姿勢とは全く異なるものといえよう。

#### 参考文献

C. Burney, A General History of Music, vol.iii, London, 1789, rep., London, 1935, New York, 1957

B. H. Davis, A Proof of Eminence : the Life of Sir John Hawkins, Bloomington, London, 1973  
Sir John Hawkins, A General History of the Science and Practice of Music, London, 1776, rep. 1853 / R1963, Dover Publications Inc., New York

A. H. King, Some British Collectors of Music, Cambridge, 1963

今井民子, J.ゲイの《乞食オペラ》について, 弘前大学教育学部紀要No81, 1999, pp.55~63

(1999. 7. 30受理)